

サッカー競技におけるゲーム・フリーズの検討 —ユース年代に着眼して—

渡邊 好人 勝田 隆 関岡 康雄

キーワード：ゲーム・フリーズ，ユース年代，コーチング，競技実績と競技レベル

Examination of “game freeze” tactics in coaching soccer for youths

Yoshito Watanabe, Takashi Katuta and Yasuo Sekioka

Abstract

In 2002, the Japan Football Association (JFA) issued a coaching manual of soccer, in which a focus was put on “good habit”, which meant “habit off the pitch” and “creative play habit on the pitch” based on good judgment and perfect skills. To build up this good habit, JAF suggested three coaching methods such as synchronized coaching, meeting, and game freeze: the last one was to be examined in this paper. In the game freeze tactic, in which a small side game was adopted, was included flows starting from ①freeze, ②instruction, ③demonstration, ④rehearsal, ⑤live, and ⑥free play. This study intended to clarify the state of conceptualization of coaches who were serving for youth generation (high school ages). Questionnaires were administered to coaches on different competitive levels so as to know the differences in their conceptualization of and the merits of “game freeze”. Also, questionnaires were mailed to 30 JFA coaches with license.

The result showed that all coaches knew about the “game freeze” method but that 4 coaches had never applied the method. The effectiveness of the method was recognized by only 4 coaches and 23 out of 27 coaches suggested there were some problems with “game freeze” tactics. Therefore, in this paper, several suggestions were presented with reference to findings derived from related areas of research in the field.

Key words: game freeze, coaching soccer, youth group, coaching manual

I 結言

サッカー日本代表チームは、2002年日韓共催で行われたFIFAワールドカップでグループリーグを2勝1分で突破し、初のベスト16進出を果たした。この結果はワールドカップに初出場を果たした前回フランス開催の1998年のFIFAワールドカップのグループリーグ全敗での予選敗退と比べると、地元開催の利点もあるが僅か4年間の成

長は著しい。FIFA（国際サッカー連盟）が発表している世界ランキング（通称FIFAランキング）の過去10年間の推移を見ても1993年のJリーグがスタートした年の43位から2004年現在まで、17位と確実にランクアップしており、少しずつではあるが、世界の上位のレベルに近づいてきている。

このような成果については、1996年以降の日本サッカ

一協会が取り組んできた(1)代表強化(2)ユース(若年層)育成(3)指導者養成という3つの部門の三位一体の一貫した強化策が実ったことが要因といわれている。日本サッカー協会(以下「JFA」と略す)技術委員会では、「日本が世界のトップランクの国と対等に戦うためには何をすればよいのか」という命題のもと、日本サッカーの強化指針としてより強固な「三位一体の強化策」を掲げている。

「三位一体の強化策」とは、ナショナルトレーニングセンター制度(以下「トレセン」と略す)を中心に「代表チームの強化」、「ユースの育成」、「指導者の育成」の3つの部門が個別に活動することではなく、上記の各部門が同じ見解・情報を共有し、より密接な関係を保ちながら、プレーヤーの強化育成と日本サッカーのレベルアップを図るというシステムである。各カテゴリー(各年代)の世界選手権(FIFAワールドカップ・FIFAワールドユース選手権など)での各国の戦術・戦略を分析・抽出し、「日本サッカーの課題」を浮き彫りにし、その3つの部門を通じ、日本サッカー界全体に寄与され、「代表チームの強化」を短期的強化、「指導者の育成」を中期的強化、「ユースの育成」を長期的強化として見据えたものである。

また、前述の「トレーニングセンター制度」の中核を形成するのは「トレセン」であるが、そのトレセンは図1にあるような位置づけで、各地域から選抜された選手たちにより良いトレーニング環境を与える強化育成の場であるとともに、指導者のレベルアップの場でもあるとされている。

そしてJFAは1996年度より情報発信・共有化の機能をより高めるためにトレセンを研修会形式に大きくその内容を一新し、「世界」を基準に抽出された「日本サッカーが世界に飛躍するための課題」として各年代に応じたテーマを設定し、その課題を克服するためのトレーニングやレクチャーを行っている。そのような背景もあり近年、サッカー競技のコーチングに関わる様々な情報が、JFA推進のもと、コーチやプレーヤーへ発信されている。

その一つの例として、JFA発刊の「サッカー指導教本」がある。その指導教本にはJFAがマネジメントした育成年代のコーチングに関連する多くの情報が示されている。

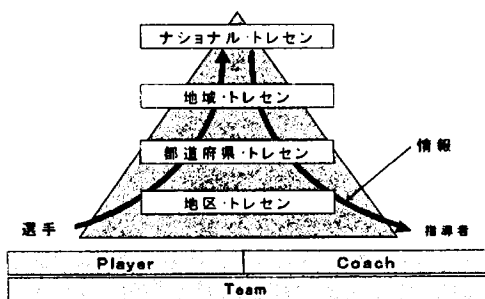


図1 トレセンの位置づけと情報の流れ

その中で、JFAは、プレーヤーがサッカー競技における「良い習慣(Good Habit)」を身につけることを、本論文で着眼しているユース年代では目標としている。JFAが定義する「良い習慣(Good Habit)」とは前述の指導教本の中では「off the pitchの『生活習慣』と、on the pitchでの良い判断とパーフェクトなスキルに支えられて発生する『クリエイティブ(創造的)なプレーの習慣』を併せたもの」としている。その「良い習慣(Good Habit)」をプレーヤーが身につける為にJFAが先の教本で紹介するコーチングの方法が3つある。

1つ目は、シンクロコーチング(synchronized coaching)であり、これは積極的に指導者が選手に声をかける・高いモチベーションを保つことを狙いとしたコーチングの方法である(サイドコーチングと表現される場合もある)。2つ目はミーティング(meeting)であり、これはプレーヤーをある特定の場所に招集し指導する形態である。3つ目のコーチング方法が本研究で着眼する「ゲーム・フリーズ(Game freeze)」である。ゲーム・フリーズの一連の流れは、スモールサイドゲーム(30m×20mのグリッドの設定で4対4や3対3を行うゲーム)において、①「プレーの停止(Freeze)」→②「指導実施(Instruction)」→③「模範(Demonstration)」→④「試演(Rehearsal)」→⑤「実演(Live)」→⑥「ゲームへの回帰(Free play)」(JFAではDemonstrationとRehearsalは必要があれば行うとしている)である。

JFA指導教本によるとそのゲーム・フリーズの中で、実践的な技術をプレーヤー達に教え、コーチは、プレーヤーたちの「見る」「聞く」「行う」という要素に積極的に働きかけていくことを狙いとしている。またこのゲーム・フリーズには簡潔・明瞭にプレーヤーへポイントを説明する「Quick, Simple, To the Point」という実施に関わるキーワードが存在する。

上記のQuick, Simple, To the Pointというキーワードに関して小野(1999)は「ゲーム・フリーズはプレーヤーにとって最もわかりやすいコーチング法ですが、時間の経過に比例してゲームに対する興味・関心は低下してしまいます。長々とした話はキーファクターが整理されていないため生じるものです。あらかじめキーファクターを頭の中で整理しておき、Quick, Simple, To the Pointを心がけましょう。」と述べている。

またJFAでは、上記3つのコーチングを行う際、テーマ(達成したい目標)に対して焦点を絞った指導「Focused Coaching」をキーワードとして上げている。これはゲームの中で、ある課題を身につけさせようとするをテーマとする場合、そのテーマに対して的を絞った指導がより効果的である事を示している。さらにゲームの中で出てきた現象に対する、いきあたりばったりの指導は、「Random Complaints」と呼ばれ、プレーヤーがテーマを理解し、実

践することの妨げるにしている。

故に指導者は、ゲーム・フリーズを行う際も Random Complaints に陥らないようにすることが必要であると指導教本で示している。

さらにこの Random Complaints について、元 JFA 技術員の小野 (1999) は「最終的な“仕上げの段階”では必要とされることであるが、個々の選手を伸ばす為には好ましくはない」としている。

この様な、テーマを絞る指導に関し、運動学習のプログラムの作成に着眼して、Daril Sidentop (1988) は、「数々の目標を掲げ、しかもそのいずれの目標についてもほとんど達成できないというのではなく、ごく限定された目標を掲げ、それを確実に達成することのほうがどれほど適切なことであろうか」と述べている。つまり、Random Complaints ではなく、Focused Coaching は JFA が推進する現状のゲーム・フリーズを支えるうえでは重要な視点といえるだろう。

さらに、JFA は「ゲーム・フリーズ (Game Freeze)」を指導者が、JFA 公認のライセンスを取得する際の実技試験ともしている。

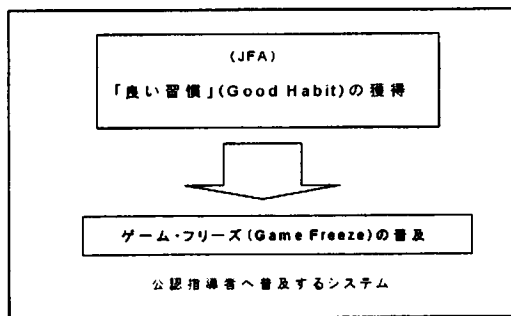


図2 ゲーム・フリーズの役割

しかし、JFA が養成したコーチの多くが、自チームでの指導方法としてこのゲーム・フリーズを効果的に活用していないと体験的に考えた。そして、本研究では論者自身が、ユース年代の指導に携わっている関係もあり、特にユース年代 (高校生年代) を指導対象とするコーチがゲーム・フリーズの在り方にまちまちの考え方を持っている現状を把握すると、JFA が意図する方法でゲーム・フリーズが行われていないのではないかと思われた。なぜならばユース年代にありがちな性格や、指導スキル・競技力等がゲーム・フリーズを阻害していると思われる要因となっていると実践を通じて常に考えていたからである。

そのようなユース年代という一つの発育・発達に注目し、指導を行うことに関して、関岡 (2004) は「特に中学生年代や高校生年代のスポーツ活動では、競技者の発育・発達にばらつきがあることは十分に予測され、個性を無視してまとめて指導することがないように十分に配慮する必要がある」と述べている。

しかしながら、先に示した教本の中に、プレーヤーの発育・発達にばらつきがある設定の集団でゲーム・フリーズを行う場合の留意点に関しての指摘は見出すことができなかった。

II 研究の方法と目的

本研究では、特にユース年代 (高校生年代) を指導対象とするコーチにゲーム・フリーズの認識に違いがあり、JFA が意図する方法でゲーム・フリーズが行われていないのではないかと、という仮説にもとづき、以下の事項に検討を加えようと考えた。

まず、競技レベルの異なる指導者を対象にし、質問紙調査を中心として基礎調査を行った。それは競技レベルの違いによりゲーム・フリーズの認識に違いが発生するのかを明らかにしたいと考えていたからである。それは JFA が推進する、ゲーム・フリーズというコーチング方法が、本来 JFA が狙いとする「良い習慣 (Good Habit)」をプレーヤーに身に付けるべくコーチング方法として実践されているのかを確認したかったからである。

まず基礎調査 Step 1 として①ゲーム・フリーズがどれくらい知られているのか、どれくらい実施されているのかを明らかにする。

次に基礎調査 Step 2 として②今回調査した指導者の競技実績は、ゲーム・フリーズというコーチングの方法に影響しているのかを明らかにする。そして、今回調査した指導者がゲーム・フリーズを行う際にどのような「効果」、「メリット」、「デメリット」を考えているのか明確にしようと試みた。「効果」と「メリット」に関しては、ゲーム・フリーズを行うことで、プレーヤーの競技力向上に何らかの効果が伴う場合を「効果がある」とし、「メリット」は良い効果の具体的な内容とした。これはゲーム・フリーズを実施する指導者は、競技実績によりその「効果」、「メリット」、「デメリット」の認識に違いがあるのかをはっきりさせることが目的であった。

さらに上記の基礎調査を踏まえ、本研究で着眼しているユース年代でゲーム・フリーズを実施する際の留意点に関して考察を加え参考情報を提示した。特にゲーム・フリーズの一連の流れ 6 項目の中から、論者がこのコーチングの方法を特徴的に現す行為と考える、②「指導実施 (Instruction)」についての留意点を、運動指導の分野や、体育教師の効果的な授業方法に関する分野の研究を多く綴った文献を参考に分析し検討を加えることを目的とした。

III Step 1・Step 2

指導者からみたゲーム・フリーズの実際

1. 方法

ここでは質問紙調査により JFA の指導ライセンスを持

つ指導者を対象に聞き取り調査を行った。調査内容は・ゲーム・フリーズの「認識」、「頻度」、「効果」、「メリット」、「デメリット」である。

1) 質問各項目の評価の観点

回答者である指導者は、質問各項目の回答を、今までの指導経験上からの主観的な評価で行うこととした。

2) 調査対象者

調査対象者は以下のとおりであった。

①全国大会出場経験のある男子のユース年代を指導している指導者が14名、全国大会出場経験のある女子のユース年代指導者が1名の計15名。

②男子のユース年代で地域大会レベルのチームを指導する指導者15名。

3) 調査期間

2004年7月下旬から2004年8月31日とした。

4) 調査方法

すべて質問紙調査方法で郵送により行った。

5) 有効回収数

回収数28部(93%)

全国レベル13名(86%)

地域レベル15名(100%)

2. 結果と考察

まず今回調査した指導者間では、ゲーム・フリーズを「知っている」と答えたのが、両レベルともに全員であった(表1)。その背景には、JFA公認の指導者ライセンスの存在がある。今回の調査は、JFA公認の指導ライセンス保持者を対象としたためにこのような結果がでたことが予測される。しかしながら、指導者はJFAの公認ライセンスを取得することでゲーム・フリーズを指導法として認識する狙いでもある。また、ゲーム・フリーズの本質はさておき、今回の調査ではJFAの指導ライセンス普及内容が行き届いている結果ともいえるのであろう。

次にゲーム・フリーズの頻度である。注目すべきは、週に2~3回行っている指導者が全国大会・地域大会レベル合わせて12人ほどいることである。これは、当初の予想に大きく反している。さらに、ゲーム・フリーズは現場において少なくとも週に1回以上行っている指導者数においては全国レベル9人、地域レベル10人であった。以上の結果を見る限りでは、今回調査した指導者の間では、ゲーム・フリーズは知られており、ある程度、ユース年代の指導においては活用されていることを示しているといえるだろう。

しかしながら、全国レベルの1人、地域レベルの3人は全くゲーム・フリーズを行っていないことがわかった。これは、ゲーム・フリーズの情報が行渡っている環境下を踏まえると28人中4人が何らかの理由でゲーム・フリーズを実施していないことを意味している。そして、全国レ

ベルで行わないと判断した理由が、「ゲーム・フリーズにメリットを感じないから」であり、地域レベルでゲーム・フリーズを行わない理由が「ゲーム・フリーズができないから」や「ゲーム・フリーズを行う競技レベルにない」であった。

表1 質問紙調査の結果

ゲーム・フリーズの認知について

	全国大会レベル	地域大会レベル
知っている	13(100%)	15(100%)
知らない	0(0%)	0(0%)
合計	13(100%)	15(100%)

ゲーム・フリーズの頻度について

	全国大会レベル	地域大会レベル
ほぼ毎日行う	1(8%)	0(0%)
週に2~3回	5(38%)	6(40%)
週に1回	3(23%)	4(27%)
月に1回	3(23%)	2(13%)
行わない	1(8%)	3(20%)
合計	13(100%)	15(100%)

ゲーム・フリーズが効果的かについて

	全国大会レベル	地域大会レベル
効果がある	2(17%)	2(13%)
効果がない	1(8%)	5(33%)
どちらとも言えない	5(42%)	6(40%)
改良すれば効果がある	4(33%)	2(13%)
合計	12(100%)	15(100%)

ゲーム・フリーズのメリットについて

	全国大会レベル	地域大会レベル
共通理解の形成	14(36%)	3(13%)
信頼関係の形成	4(10%)	2(8%)
フィードバックの即時性	13(33%)	15(63%)
その他	8(21%)	4(17%)
合計	39(100%)	24(100%)

ゲーム・フリーズのデメリットについて

	全国大会レベル	地域大会レベル
特定人物だけへの指導になる	13(28%)	10(29%)
信頼関係の不形成	14(28%)	4(11%)
指導主観的になりやすい	10(20%)	6(17%)
思考能力の欠如	4(8%)	10(29%)
その他	9(18%)	5(14%)
合計	50(100%)	35(100%)

次に「効果」についてである。この質問項目は、事項の「メリット」と類似しているが、メリットを含めて効果とし、どの程度から効果あるのかについては言及しなかった。

まず効果について、注目すべきは、「ゲーム・フリーズに競技力向上の効果がある」という指導者が全国大会・地域大会レベルで27人中4人であるということである。これは競技実績に関係なく、今回調査した指導者の27人中23人がゲーム・フリーズに対し何らかの疑問があるということを示唆している。

今回調査対象とした指導者間で、それを顕著に表すのは、地域レベルの5人が「ゲーム・フリーズに競技力向上の効果がない」と完全に言い切っているのに対して、全国大会レベルでは4人が、「ゲーム・フリーズは改良すれば効果がある」と答えている点である。

これを検討すると、全国レベルの指導者がゲーム・フリーズの「改良」に至った情報を共有化することで、地域レ

ベルの指導者もゲーム・フリーズの効果に対する認識が向上し、実施率も向上する可能性を示唆しているのではないのだろうか。

次にメリットについて考察を加えると、全国レベルの指導者が地域レベルの指導者よりも「共通理解の認識」に対しメリットとして答えた数が多かった。

しかしながら、地域大会レベルの指導者では、共通理解の認識に対して得られた回答は3人であった。地域大会レベルでのメリットの回答で多かったのは、「フィードバックの即効性 15人」であった。

次にデメリットである。まず、「特定人物だけへの指導になってしまう」ということに関しては、全国レベルが13人、地域レベルが10人で全国大会レベルの方がやや多かった。また、「信頼関係の不形成」・「権威主義的になりやすい」という項目に関しても、全国大会レベルの方がより高い数値を示した。しかし、地域大会レベルの方がより高い数値を示した唯一の項目が存在する。それは、「思考能力の欠如」である。特に注目すべきは、全国大会レベルは4人に対し、地域大会レベルでは10人という回答数になっている点である。

以上のデータの検討により、明らかに全国大会レベルと地域大会レベルとは、ゲーム・フリーズの細部に渡り認識に違いがあり、ばらつきがあることが分かった。

IV ゲーム・フリーズを用いる場合の留意点（参考情報）

サッカーのコーチングにおいて、ゲーム・フリーズは、指導者の必要に応じて取り入れられるコーチングの一手段であることはいうまでもない。しかし、ゲーム・フリーズそのものが、競技者の身体的動きを停止させることから、その間（フリーズさせている間）のコーチの行動について、「時間の経過に比例して、プレーヤーのゲームに対する興味・関心は低下させてしまう」（小野 1999）という指摘もある。そこで、コーチングにおいてゲーム・フリーズを用いる場合、その間の指導において留意すべき事柄を、関連する分野からの知見をもとに参考情報として提案した。

1. 「体育時の学習指導」の観点から

体育の授業は、「運動学習の効果を狙う」といった観点においてサッカーのコーチングと共通したのがあるといえる。そこで、スポーツを用いて授業を行う「体育」の観点から考察してみたい。

高橋（2002）は、様々な体育時の学習指導の研究を通して、授業中に行われる教師活動が、①インストラクション（説明・提示・演示）、②マネジメント（用具準備・移動・待機）、③モニタリング（巡視・観察）④相互作用（賞賛・励まし・助言）の4つに大別されることを紹介したうえで、この「4大教師行動」の中で、「学習効果に肯定的

に影響するのは、相互作用の頻度のみで、逆にインストラクションやマネジメントの頻度や時間量は学習成果にマイナスに影響する」と述べている。

また、Daril Sidentop（1988）は体育時の学習指導の「勢い」を、活動中あるいは、その運動のペースを落とすようなことがないことと定義し、この「勢い」を保持するためには、教師の進行中の活動をさえぎる行動、つまり「割り込み」をできる限り慎むことが重要であると述べ、さらに「勢い」を保持することこそが、理想的な授業を展開する上で重要であるとしている。

これらの指摘は、前述のゲーム・フリーズを行う際の留意点である、「時間の経過に比例して、プレーヤーのゲームに対する興味・関心は低下させてしまう」と共通したものであり、ゲーム・フリーズを行う際には、できる限りインストラクションの頻度や時間量を慎み、ゲームに関わるプレーヤーの「勢い」を保持する事に留意すべきであるといえるであろう。

また、Daril Sidentop（1988）は、体育時の学習指導における発問（質問）について、運動学習に効果的な指導者の質問方法を、4つにカテゴライズした。その4つは1、回顧的発問（Recall questions）2、集中的発問（convergent questions）3、分散的発問（Divergent questions）4、価値的発問（value questions）である。その中で、Sidentopは、「分散的発問（Divergent questions）」の、プレーヤーに対する「どのように、どんな方法で」という質問方法が、その性質から、「プレーヤーから答えを引き出そうとする」ものであると述べている。また、「回答は、正しいか間違っているかで判断されるものではなく、プレーヤーの回答は創造的であることが求められるが、必ずしも経験的（実証的）に証明できるものでなくてもよい」と指摘している。

これは、ユース年代の心理的な側面として、勝部、糸野（1981）らが指摘するように、「論理的思考と、経験の裏づけが乏しいという経験知のギャップが存在する」、ということに留意したゲーム・フリーズを行う際に考えられる一つの参考情報であるといえる。

2. 運動指導の観点から

次に、運動指導の観点から、フリーズした際にコーチが何についてインストラクションをするのかについて考察してみたい。この点に関して、高校生年代の部活動に着眼し、心理的ストレスを研究した、渋谷、森（2004）らの研究によると、高校運動部員が、自身の「競技力の未熟さのみ」を何らかの手段により知ることによって、「大変なことだ」「自分を傷つけることだ」と考え、彼らは努力をすることを諦め、チームメイトに愚痴を言ったり、気晴らし行動をとったりするなど、ストレスに対応する傾向が強く、その結果ストレス反応が表出することが多いと報告

している。

これは、ゲーム・フリーズを用いて、指導者がプレイヤーの「ミス」、つまり「競技力の未熟さ」に的を絞るゲーム・フリーズをし、インストラクションをした際、起こりうると予想されるプレイヤーの反応といえるのではないのだろうか。つまり指導者は、何を指摘するのかに留意しなければならない。

さらに運動指導の観点から、勝田(1998)は、「コーチングは全てQ&Aで行う。素晴らしいコーチは素晴らしい質問者でなければならない」としている。さらに同じく勝田は、プレイヤーの自主性とプレイヤー自身が判断する能力を向上させるコーチングの方法を実践できるトレーニングとして「ヴィルブルー方式」を提示している。

これは、フランスラグビー協会のテクニカルディレクターであるヴィルブルーが行う練習方式である。その詳細は、通常のゲームの場面を設定し、コーチがゲームに入りプレイヤーと一緒に動きながらボールを配球し、プレーを止めて、プレイヤーに質問をする。そして、プレイヤーが望ましいプレー、求められるプレーを見つけ出すまで質問が繰り返され、プレイヤーが納得のいく答えを得られ、行うべきプレーのイメージが明確になったら、実際にゆっくりとゲームをさせてみる。そして、時にはプレイヤーの答えが間違っていると指導者がわかっている、プレイヤーたちに失敗を経験させながらに行わせるという、ゲームに即したものである。

JFAが提示している、good habit(良い習慣)の獲得に伴うプレイヤーの「判断能力」を向上させるコーチングを実施した一つの例といえる。

3. 留意点のまとめ

体育時の学習指導・運動指導の観点の指摘から、ユース年代において、コーチングの方法としてゲーム・フリーズを用いる場合、その間の指導において留意すべき参考情報として以下の4点を得られた。

- ①できる限りインストラクションの頻度や時間を減らし、相互作用(賞賛・励まし・助言)の時間を増やし、ゲームに関わるプレイヤーの「勢い」を保持すること。
- ②ユース年代の特徴である論理的思考と、経験の裏づけが乏しいというギャップを埋めるために、分散的発問(Divergent questions)を用いること
- ③「競技力の未熟さ」に的を絞るゲーム・フリーズをした際、起こりうると予想されるプレイヤーの反応を知っておくこと
- ④答えが間違っていると指導者がわかっている、プレー

ヤーたちに失敗を経験させながら行わせること

これによりJFAが指摘する、「ゲームをフリーズしている時間経過に比例して、プレイヤーのゲームに対する興味・関心は低下してしまう」という留意点以外にも、ゲーム・フリーズを実施する際に多くの留意すべき点があることが参考情報として提言された。

V 要約と今後の展望

本研究では、基礎調査から指導者によりゲーム・フリーズの認識にばらつきがある知見を得た。その後ユース年代へゲーム・フリーズを行う際の留意すべき事柄を、関連する分野からの知見をもとに参考情報として提案した。

それにより、JFAが指摘する、「ゲームをフリーズしている時間経過に比例して、プレイヤーのゲームに対する興味・関心は低下してしまう」という留意点以外にも多くの留意すべき項目があることを知見として得た。

ここから、考察できることは、コーチングは提案・誘導型で行うべきであること(勝田, 2004)や、コーチングは、コーチが教える時間(ティーチング)と競技者を育む時間(コーチが待つ時間: ウェイティング)で成立しているということである(関岡, 2004)

最後に今回の研究では、ゲーム・フリーズを競技実績と比較検討しながら認識のばらつきに注目し、ユース年代におけるゲーム・フリーズの在り方を明らかにしようと試みた。しかしながら、標本数が少なく明確な傾向を見出すには至らなかった。

また競技実績が上がれば競技力向上意欲が高まるプレイヤーが多くチームに集まる傾向はあくまでも仮説であり、再度検討が必要ということも示唆された。それは、今回調査を依頼したチームのプレイヤーの競技力について一定の尺度を利用し評価をしてみたということの意味する。また、アンケートの質問項目・回答項目に関しても、文献を参考に任意で設定したものであり、客観性にかけた部分は否めず、今後検討すべき項目といえる。

また、ゲーム・フリーズについて、「いつフリーズすべきか」、「他競技でゲーム・フリーズと類似したコーチングはあるのか」、「性差についての検討」、「他の年代での検討」、「プレイヤーに対する具体的な調査」といった事に関しては数値を用いた実践的な検討を行っていない。さらに、今回、研究することで導き出されたいくつかの要素が机上の空論とならず、現場において有効に活用されるかを調査する必要があるといえるだろう。

参考・引用文献

- 阿部征次(1992)コーチングの効果的遂行の条件について：全国大会出場高校のコーチについて。日本体育学会大会号 Vol. 43 pp. 762

- 阿部征次(1995)コーチングの効果的遂行の条件(4)：コーチングの技法としてのミーティング. 日本体育学会大会号, Vol. 46 pp. 532
- Beyer, Erich (1993) スポーツ科学辞典. 大修館書店
- 深見英一郎 (2004) 近年の米国に見る体育教師の効果的フィードバックに関する研究の動向. 体育学研究. vol. 49:471-482
- 藤谷かおる・出村慎一・北林保・畑田雄也・岩田英樹・宗倉啓・岡出美則 (2004) 高等学校における「よい体育授業」の構成要因及びその評価項目内容の適切性：教師と生徒間の比較体育学研究. 体育学研究. vol. 49:471-482
- Giro Bisanz・Gunnar Gerisch (1997) 指導者のためのサッカー強化書. ベースボール・マガジン社
- JFAnews (2001) (通巻 205 号) 日本サッカー協会
- JFAnews (2003) (通巻 234 号) 日本サッカー協会
- JFAnews (2000) 強化指導指針 日本サッカー協会
- JFA テクニカルレポート (2002) 日本サッカー協会 : pp. 45~65
- Jim Greenwood 江田昌佑 (1991) シンク・ラグビー. 泰流社
- Jim Greenwood 江田昌佑 (1993) トータル・ラグビー. 泰流社
- 金子明友・吉田茂・三木四郎 (1996) 教師のための運動学—運動指導の実践理論. 大修館書店
- 勝田隆 (2002) 知的コーチングのすすめ. 大修館書店
- 久保正秋 (1995) 『コーチング』概念の分析. スポーツ教育学研究
- 清雲栄純(1993)コーチングを考える：サッカー日本代表チームのコーチングについて. 日本体育学会大会号. Vol. 44 pp. 522
- Konrad Widmer・蜂屋慶・谷井博・窪島務・川村覚昭共訳(1980)スポーツ教育学. 東洋館出版社
- 衆野豊編 (1988) スポーツと文化社会. ベースボールマガジン社
- 松本育夫(1991)サッカーに世界はなぜ熱狂するのか. 毎日新聞社
- 文部科学省 (2000) スポーツ振興基本計画
- 中条一雄(1998)日本のスポーツはなぜ衰退したか. 東急エージェンシー出版事業部
- 中村敏雄(1991)スポーツルールの社会学. 朝日選書
- 小野剛(1999)クリエイティブサッカー・コーチング. 大修館書店
- 呂・野原(1993. 10) サッカー授業のミニゲームにおけるフィードバックの影響についての分析的研究. 日本体育学会大会号 Vol. 44 pp. 836
- 櫻井英七郎 編 (1998) 球技用語辞典. 不昧堂出版
- 関岡康雄 編著(2004)コーチと教師のためのスポーツ論. 道和書院
- 渋谷崇行, 森 恭 (2002) 高校運動部員の部活動ストレッチに対するコーピング採用とストレス活動. スポーツ心理学研究 vol. 29:19
- Siedentop, Daryl (1988) 体育の教授技術. 大修館書店
- 高橋健夫(2002)教師の専門的力量を高めるための授業研究. 体育科研究 大修館書店 P10-1
- 玉木正之(1999)スポーツとは何か. 講談社現代新書
- 多木浩二(1995)スポーツを考える. ちくま新書
- 吉田他(1997)競技力の輪郭 III : コーチングのあやまりについて. 日本体育学会大会号, Vol. 48 pp. 544
- 山本茂(1991) スポーツパラダイム. ベースボールマガジン社
- 米村耕平・福ヶ迫善彦・高橋健夫 (2004) 小学校体育授業における「授業の雰囲気」と形成的授業評価との関係についての検討. 体育学研究. vol. 49. 231-243
- 財団法人日本サッカー協会 (2002) サッカー指導教本
- 財団法人日本サッカー協会(2004)LOW OF THE GAME サッカー競技規則アドスリー
- Jcalcio 最新 FIFA ワールドランキング
<http://www.fifaworldranking.com/wrnew.html>